

「“技術立国”を担う科学技術人材・組織・制度
—産・官・学の課題—」

レポーター

勝本 雅和	(東京工業大学)
永田 晃也	(科学技術政策研究所)
小林 信一	(電気通信大学)

パネリスト

長谷川 正明	(文部省)
並木 徹	(通商産業省)
浅川 敏郎	(科学技術庁)
長田 純夫	(長崎県工業技術センター)
小野田 武	(三菱化学)
中島 尚正	(東京大学)

企画の趣旨

資源の乏しい我が国にとって、“技術立国”論は永遠の課題である。科学技術や産業の展開、あるいは国際的な環境変化等に対応し、常に新たな“技術立国”論が求められている。本パネルではこのような視点から、現在我が国が直面している課題を洗い直し、人材／組織／制度と産／官／学の2軸から成るマトリックスに分類し、より本質的な課題は何か、それに対する取り組みはどのように進んでいるか、そして解決の方途は何かを詰めていきたい。

他の企画との関係もあり、本パネルでは「政策形成のための基本体制のあり方」については検討対象に含めず、よりミクロな実態のレベルでの議論の展開を期待している。

とはいえ、対象とする領域が広大であるため、企画委員会で調査報告や文献等に指摘されている課題群を収集し、討論資料を作成した。また、それらの課題群を学問研究の立場から捉え直し、本質的な課題の所在を若手研究者の視点から整理して総括的報告を行う。

会の進行はこれらの報告の後、ややフォーマルな立場から第1部のパネル討論を行い、夕食後さらにインフォーマルな立場から第2部のパネル討論を行う。ここでいうフォーマル、インフォーマルの区分はさして重要ではなく、いずれも可能な限り真実に基づく本音の議論を展開すべきものとした。このうち特に第2部を設定した意図は、パネルの枠組みから判断し、討論に長時間を要するテーマであるにもかかわらず、お忙しいパネリストを長時間拘束することが、困難であろうと判断し、また、会場の雰囲気次第に本音ベースの議論に移ることを期待し、“Rump Session”形式に模して多少のアルコールを用意して延長戦を設定した次第である。

両パネルのまとめとして、①本質的な課題の明確化、②実施ないし解決可能性の明確化、③問題の所在や核心が不明瞭であったり、解決の方途が見出し難い課題に対しては、今後の学会活動を通じて取り組む等の方途を明確にすることを目指したい。